戦後青森県の市長選挙と歴代市長　④

藤　本　一　美

＜総目次＞

序文
第一部　青森市長選挙と歴代市長（『政治学の諸問題　X』〔専修大学法学研究所，2020年２月）
第二部　八戸市長選挙と歴代市長（『専修法学論集』第138号，2020年３月）
第三部　弘前市長選挙と歴代市長（『専修大学社会科学研究所月報』第250号，2020年４月）
第四部　三沢市長選挙と歴代市長（本号）
第五部　黒石市長選挙と歴代市長
第六部　五所川原市長選挙と歴代市長
第七部　むつ市長選挙と歴代市長
第八部　十和田市長選挙と歴代市長
第九部　平川市長選挙と歴代市長
第十部　つがる市長選挙と歴代市長
＊参考資料
結語

第四部　三沢市長選挙と歴代市長

＜目次＞

第１章　三沢市の概要
第２章　三沢市長選挙
第３章　歴代三沢市長
第４章　政権交代の類型（パターン）
第５章　三沢市政治の特色
＊参考文献

第１章　三沢市の概要

＜図表①＞三沢市の位置

出典：『三沢市ホームページ』

三沢市は図表からも明らかなように，青森県の南東部に位置しており，東は太平洋に面し，西は小川原湖に臨んでいる。東西約11km，南北約25km，面積は約120平方 km の平坦地で，世界的に重要な湿地としてラムサール条約に登録された「仏沼」を始めとする豊かな自然に恵まれている。

三沢市域は，古くから馬産地として栄えた県南にあって，江戸時代には藩政牧場の「木崎牧」に含まれ，住民は馬産や漁業に携わっていた，だが，太平洋戦争後に旧日本海軍飛行場が米軍の三沢基地となり，三沢は大きく変貌を遂げた。

現在は，全国有数の航空施設がある大空の街として，約４万人の人口に加え，多くの米軍人，軍属，およびその家族など１万人が暮らし，異国情緒漂う国際都市として独自の発展を続けている。

三沢市では，世界初の太平洋無着陸横断飛行をなし遂げたミス・ビードル号がきっかけで，米国ワシントン州のウェナッチ市・東ウェナッチ市との姉妹都市交流や，アメリカンデーや国際サマーフェスティバル，三沢基地航空祭など，数々の目新しいイベントが毎年開催されている。

元々三沢は，1880年９月19日に百石村から分村独立し，1889年４月１日には，町村制施行により三沢・天ケ森が合併し三沢村が成立した。戦後の1948年２月11日に上北郡三沢村，六戸村，下田村，および浦野館村の一部が合併して，大三沢町が発足。約４年後の1952年１月11日には，三沢空港が開設され，日本航空が千歳便，東京便を就航させ，その後1958年９月１日，大三沢町が三沢町に改称後，即日市制施行し，三沢市が発足した。

2019年６月１日現在，三沢市の人口は３万8,877人を数える。

三沢市の冬は，北国でありながら降雪量が少ないことと，北西から吹く季節風のため晴天の日が多いことが特徴だ。春から夏にかけて吹く偏東風（ヤマセ）の影響で，海岸地帯は冷気と濃霧におおわれることもあり，また，梅雨明けが遅く，夏が短いのも特徴である。

豊かな表情を持つ三沢市の自然，歴史，および文化遺産は次の通りである。空との深い関わりを物語る「青森県立三沢航空科学館」，国際交流の拠点施設「国際交流教育センター」，近代洋式牧場を開牧した斗南藩士・廣澤安任の紹介と市の特産物を販売する「道の駅みさわ斗南藩記念観光村」，さらには，鬼才・寺山修司の独自世界を紹介する「寺山修司記念館」などがあり，「国際文化都市」三沢を実感することができる。

＜図表②＞　三沢市の歴代市長，就任時，退任時

代	氏名	就任	退任	備考
初代	林静	1955年５月１日	1959年４月30日	
2-6	小比類巻富雄	1959年５月１日	1978年７月31日	在職中に死去
7-9	小桧山哲夫	1978年９月７日	1986年12月13日	収賄容疑で逮捕され辞職
10-14	鈴木重令	1987年２月１日	2007年５月１日	在職中に死去
15-17	種市一正	2007年６月17日	2019年６月16日	
18	小桧山吉紀	2019年６月17日		

出典：『三沢市ホームページ』

第２章　三沢市長選挙

①1959年の市長選挙

三沢市は米軍基地の街として過去12年間に村から町へ，そして町から市へと急速に膨れ上がってきた。1948年に村から町制をしいてわずか10年経て市制をしいた。それだけに政争も激しく，今回の市長選でも，市議会勢力の与野党がそのままで，激しい一騎打ちを演じた(1)。

1958年９月１日，三沢市は県内七番目の市として発足。市長には，町長の林静が就任した。翌1959年４月30日，初めて市長選挙が行われ，林静・現市長（67歳）と小比類巻富雄（48歳）・前県議との一騎打ちとなったものの，結果は，小比類巻が7,188票，林が5,582票を獲得し，1,606票の差で小比類巻が勝利を手にした。今回の市長戦で，小比類巻が現市長の林を破った背景として，有権者が48歳という小比類巻の若さを買ったのだと，推測された。なお，投票率は，73.83％に達した(2)。

晴れて三沢市長に当選した小比類巻富雄・市長は，記者団に勝利の喜びと今後の課題を次のように語った。

「７年の町政経験を生かし，まずガラス張りの市政という基盤の上に立った三沢市を築き上げたい。このため私を選んでくれた市民の声は十分反映させねばならない。いままでとかく“暗い市政”という風評や，頼りないという声も聞かれたので，これらの点を是正し，市民と一緒に明るい政治をやりたい。市議会についても同志とよく相談したうえ対処する考えだ。もちろん自民党の地盤に立ってのことだが，革新の議員とも党派を超えた融和をはかることに力を注ぐつもりだ」(3)。

実は，小比類巻富雄は1948年の町制施行時に，初代大三沢町長に就任しており，また，1950年には県議に転出，そして今回1959年９月，市長選に出馬したように，いわば，三沢政界の重鎮でもある(4)。この小比類巻・新市長の下で，三沢市は新しく発展をとげることになる。

≪注≫

（1）「三沢市」『東奥年鑑　昭和34年版』〔東奥日報社，1958年〕，73頁，米軍基地から地元に落とされる金額は年間約75億円だといわれ，市の経済で大きな比重を占めており，三沢市は「基地依存経済のまち」と言われてきた（「市政施行」『三沢市史　通史編』〔三沢市，1988年〕，258頁）。

（2）『東奥日報』1959年５月１日（夕）。

（3）「ガラス張りの市政に―小比類巻三沢市長の話」同上。

（4）「小比類巻富雄」『青森県人名事典』〔東奥日報社，2002年〕，225頁。

②1963年の市長選挙

任期満了に伴う市長選挙は，1963年４月30日に行われた。立候補したのは，現市長の小比類巻富雄（52歳）と元市議会副議長の鈴木元の保守同士で，両者は自民党の公認を申請したものの，いずれも公認を得ることができず無所属で戦った(1)。

選挙の結果は小比類巻・市長が7,250票，鈴木・元市議が7,141票を獲得，わずか109票の僅差で小比類巻・市長が逃げ切り，再選を手にした。なお，投票率の方は68.51％に留まり。前回に比べて5.32ポイント下回った(2)。

当初，市長選は，小比類巻・市長の独走だと見られていた。しかし，市政界を二分する北村正哉・県議派が元市議会副議長で市議の鈴木元を担ぎだし，激しい選挙戦となり，小比類巻・市長に迫った。だが，小比類巻・市長は現職の強みを発揮して辛くも小差で勝利したのだ(3)。

僅差で再選された小比類巻・市長は，記者団に今後の課題について，次のように語った。

「私は４年間市長の職にあって私の考えていたことの基礎となるべき仕事をやってきているだけに，こんごの４年間はこれに肉づけをしてほんとうに市発展百年の大計のもとを作り上げてゆく覚悟である。市政はすべて市民のためのものであり，私はすべての行政を市民の幸福のためにということを第一モットーとしてこんご皆様のために尽くしていきたい。市にとっては米軍基地問題をはじめとくに小川原湖を中心とした工業開発観光開発など，こんご発展するための貴重な資源と条件がそ

ろっているだけに，これを100％に利用してゆきたいと思う」[4]。

一般的に，市長選で二期目は現職が強いといわれる。しかし，小比類巻・市長は109票差という僅差でようやく再選された。4年間の政策に，大きな瑕疵があったと思われない。要は，保守同士の争いの渦中で，現職として自民党の公認を得ることができなかった事実が，小比類巻・市長にとって最大の弱点となったと，いわねばならない。

≪注≫

（1）「三沢市」『東奥年鑑　昭和38年版』〔東奥日報社，1962年〕，126頁。

（2）『東奥日報』1963年5月1日（夕）。

（3）『デーリー東北』1963年5月1日，「青森・三沢両市長選挙」前掲書『東奥年鑑　昭和38年版』，107頁。

（4）「市民の幸福第一に―三沢市　小比類巻氏」『デーリー東北』1963年5月1日。

③1967年の市長選挙

任期満了による市長選挙は，1967年4月28日に行われた。今回の市長選は，自民党公認を手にした現職の小比類巻富雄（56歳）・市長と共産党公認で新人の奥本盛良との一騎打ちとなった。その結果は，小比類巻が1万779票を獲得し，奥本は1,646票に留まり，9,133票の大差で小比類巻・市長が三選された。投票率は，小比類巻・市長の勝利が確実視されたこともあって，有権者の足は鈍く，61.10％という低率に留まった[1]。

敷衍すれば，市長選では，小比類巻と市を二分してきた北村正哉・県議が副知事に就任したことで，小比類巻と北村両派の一本化が成就。その結果，有力な対抗馬だった元市議会副議長の鈴木元が県議選に回り，保守系からの立候補者は小比類巻・市長以外にいなかった。ただ，無競争を避けようという共産党の作戦で奥本盛良が立候補したが，現職の小比類巻・市長の独走に終わった。このような状況は，市民が“小比類巻市政”の総仕

上げを期待していた，といえなくもない[2]。

三選を果たした小比類巻・市長は，選挙戦で共産党候補を相手に戦った経緯を述べた後，今後の抱負を次のように語った。

「立ち合い演説会や街頭で自分の政策を訴えてきたが，一般に盛り上がりの少なかったことが残念です。ともかく公約を重点的に実現させ，市民の付託にこたえるよう大いに努力する覚悟です。諸政策のうち，とくに道路整備に力を入れ，主要道は全面的に塗装したい。また下水道も任期中にぜひ軌道に乗せるつもり。その他団地を含む中小企業の育成，農業政策はこれまでの延長で推進。教育面では学校そのものはよくなったが不足の整備はPTAに負うところが多いので。これを少なくするための努力をするとともに，社会教育の向上をはかりたい。

基地公害の問題，公園施設その他明るい都市建設に力を入れるが，財政上国への依存度が7割という状況なので，考えていることを早急に進めることはむずかしいが，政策推進に力コブを入れると同時に財政の確立に努めるつもりだ」[3]。

前述したように，小比類巻・市長が三選された背景として大きいのは，保守内部で“手打ち式”が実現したことだ。つまり，最大の政敵であった北村県議が副知事に就任したことで，保守陣営の住み分けが可能となったからである[4]。

≪注≫

（1）『東奥日報』1967年4月29日。

（2）『東奥年鑑　昭和42年版』〔東奥日報社，1966年〕，106，145頁。

（3）「道路，下水道に重点　小比類巻三沢市長語る」『デーリー東北』1967年4月29日。

（4）『東奥日報』1967年4月29日，『デーリー東北』1967年4月29日。

④1971年の市長選挙

任期満了に伴う市長選挙は，1971年4月25日に行われた。今回は，現職の小比類巻富雄（60歳）・市長に対して2人の若い新人が挑戦し，三どもえの戦いとなった。しかし，自民党公認で現職の小比類巻富雄・市長が

9,649票を獲得，選挙上手と現役の強みを発揮し，無所属新人で若い羽立隆（6,818票）に2,831票の差をつけて四選を果たした。無所属新人の川口亀蔵は770票に留まった。

三沢市は米軍基地の縮小，むつ小川原開発といった大きな課題をかかえており，揺れ動く市政に候補者たちの見る市民の目はいつになくきびしかった。だが，結果的に，小比類巻富雄・市長が次の4年間も引き続いて転換期の三沢市政を担うことになった。なお，投票率は，三どもえの戦いとなったことで，76.13%を記録し，前回を15.03ポイント上回った(1)。

実は，今回の三沢市長選では，告示前まで対立候補が現れず，一時，県下初の無投票当選になるのではと見られていた。しかし，告示直前に羽立隆・市議が立候補を決意し，また川口亀蔵も出馬して，一転して保守系による三者間の争いとなった(2)。

選挙戦では，巨大開発と農業の先細りを反映して，この2つが争点となった。小比類巻・市長は，「地元と結びつく開発，米以外の農業への再編成」を主張した一方で，羽立候補は「市政に新風を送ると同時に実のある企業誘致」を唱えた。また，川口候補は「片寄らぬ政治の実現と，住民本位の開発」を公約として掲げた(3)。

選挙結果は，小比類巻・市長が政界の幅広い支援と，過去20年にわたる実績を背景に四選を果たした。小比類巻・市長には，円熟した安定感があり，これが特に高齢者層から絶対的な支持を得た要因だ，といわれる。さらに，地盤といわれる浜通り地区の票も順調に伸びたことも勝因の一つだった。

これに対して，新人の羽立は鈴木前県議らのテコ入れや若さを買われて6,818票と追い上げて注目されたが，政策面で具体性に欠けるなどいま一歩の迫力がなく，組織力，老練さにまさる現職小比類巻・市長の厚い壁を崩せなかった。なお，無所属ながら市政浄化を訴え続けた川口は770票に留まったものの，市の現状をつぶさに市民に訴えた功績は見逃せない(4)。

実は，新人の羽立隆は自民党三沢支部の幹事長を務める現職の市議であり，小比類巻・市長のふところ刀として広く知られていた，そのため，市長選への立候補は小比類巻陣営にとって，大きなショックとなった。しかし，告示２日前の出馬声明という出遅れが致命傷となった。羽立の善戦は特筆され，惜敗であった(5)。

見事に四選を果たした（町長時代も含めれば通算六期）小比類巻・市長は，次のように勝利の喜びと今後の課題を語った。

「おかげさまで当選させていただきました。しかし，相当数の批判票が出たことについては，今までの市政を再検討し，非は非と認め市政を担ってゆきたい。今回の市長選は私としては，もっと多くの批判票がでることを覚悟していた。

県議選のあとだけに政治的動きもあって苦慮したが，私はあくまで政策一本で市民に訴えた。これが多くの支持を得たと思う。

四選がどうのこうと言われるが“住民のための市政”という基本態度は，今後も続け巨大開発と基地縮小で生じるギャップを埋めていく方針だ」(6)。

確かに，今回の市長選では，小比類巻・市長は四選された。しかし，次回の市長選では必ず「多選（五期）・高齢（64歳）」批判が生じることは避けられないと，思われる。

≪注≫

（１）「現役の強さをみせる　三沢市長選」『デーリー東北』1971年４月26日。
（２）同上。
（３）「支持を得た巨大開発」『東奥日報』1971年４月26日。
（４）同上。
（５）「選挙」『東奥年鑑　昭和46年・47年版』〔東奥日報社，1970年〕，115頁。
（６）「政策一本が支持された　小比類巻氏の話」『東奥日報』1971年４月26日。

⑤1975年の市長選挙

任期満了に伴う市長選挙は，1975年４月27日に行われた。五選を目指す

自民党公認で現職の小比類巻富雄（64歳）・市長と三沢市農協参事で無所属新人・林肇（49歳）との一騎打ちとなり，激しい選挙戦が展開された，結果は，小比類巻が１万0,064票を獲得，林肇は9,774票を獲得し，小比類巻が僅か290票の僅差で逃げ切り，ついに五選を果たした。市長選では，過去16年にわたる小比類巻市政への批判票が林に集結し，小比類巻は苦戦を余儀なくされ，林はむしろ善戦したといえる。選挙運動が激戦だったので，投票率の方も80.78％を記録し，前回を4.65ポイント上回り，これまでの最高であった(1)。

敷衍すれば，市長戦では，小比類巻市政にあきたらない批判票が林候補に集まり，林の善戦は市民の注目を集めた。革新系は独自候補を立てることができず，足並みが乱れ，社会党は林を支持し，共産党と公明党は自由投票となった(2)。

小比類巻・市長は市議29名中21人をまとめ，市民の各団体への協力を得て選挙戦に臨み，これまでにない結束ぶりを示した。その上で，「16年間四期の実績をあげながら，豊富な経験を生かして市政発展を図る」，と有権者に支持を訴えた。

これに対して，新人の林候補は，後援会組織の「希望にあふれる街をつくる会」，北村和武・会長を中心とする市議４名，地区労，社会党の推薦を受けて，“長期政権の小比類巻市政は停滞している，市政の流れを変えよう”と有権者に訴えて回り，多選批判を前面に打ち出し，小比類巻五選阻止にやっきとなった。

しかし最終的には，選挙上手な小比類巻・市長に軍配が上がった。ただ，新人・林の健闘ぶりが光った市長選であった。投票の結果は，「小比類巻の長期政権に飽きたらない市民と青年婦人票が林氏に結集したと見られる。小比類巻は約１万票獲得したものの，予想どおり票が伸びず苦戦したが，批判票半分を抱えた今後の市政はきびしいものになる」，と思われた(3)。

市長選で五選という偉業を果たした，小比類巻・市長は当選の喜びと今

後の課題について，次のように語った。

「今度の選挙ぐらい苦しい戦いはなかった。これまでの選挙では民意というものがわかり，それなりの判断はついた。しかし今回は何かバク然として感じでつかめなかった。私としては前四回の選挙の倍以上歩いた。

いずれにしろ，290票という小差には，私自身もびっくりした。この批判票は，私に対する批判として受け止めねばならないし，今後の市政についても十分考慮しなければならない。

ただ市政は流れを変える―といっても頭のすげ変えだけでは流れを変えるということにはならないと思っているし，私としてはこれまでの経験を生かし，住民が幸せになる行政をさらに進めていく」(4)。

既述のように，小比類巻・市長はついに五選された。県内では初めてのできごとで，20年間にわたり，三沢市政は，「小比類巻体制」の下で運営されることになった。ただ，留意すべきは，長期政権は腐敗するというのが政治の鉄則であり，政党関係者や市民も首長の「多選・高齢」問題を真剣に考える必要があろう。

≪注≫

（1）『東奥日報』1975年４月28日，『東奥年鑑　昭和51年版』〔東奥日報社，1975年〕，210頁。

（2）『デーリー東北』1975年４月28日，前掲書『東奥年鑑　昭和51年版』，210頁。

（3）『東奥日報』1975年４月28日。

（4）「批判票謙虚に受ける　五選の小比類巻三沢市長」『東奥日報』1975年４月28日。

⑥1978年の市長選挙

市長選挙は任期満了を待たずに1978年９月17日，実施されることになった。それは，町長三期，市長五期を務めた小比類巻富雄・市長が７月31日に死去され，それに伴い，1979年４月に予定されていた選挙が繰り上げられたからだ。選挙戦には，県議を辞任した小桧山哲夫（56歳）が自民党の

公認を得た一方，新自由クラブからも推薦を受け，市議会与党や無所属市議15人で支援体制を固めた。それに対し，前助役の沖沢重太郎は無所属ながら，社会党，地区労連推薦，市議会14人や市内各団体の支援を得て立候補した。実は，両者はともに小比類巻・市長の下で，「沖沢助役―小桧山収入役」と手を援えた，いわば“身内同士”であった。９月17日に実施された選挙の結果は，立ち上がりの早かった小桧山候補が予想外の１万2,910票を獲得し，沖沢候補（9,645票）に3,265票の大差をつけて初当選した。投票率は激戦を反映して，84.96％と史上最高を記録した(1)。

小桧山の勝因は，出足が早く票固めをしたこと，また，自民党の公認を得た上に，不動票である自衛隊票の獲得に成功したからだ。選挙は身内同志の戦いとなり，政界はもちろん，市民を真二つに割った激しい選挙戦が展開された(2)。

敷衍すれば，上で述べたように，市長選は９月17日に行われ，新しい市長に前県議の小桧山哲夫が前助役の沖沢重太郎に3,200余票という大差をつけて破り，初当選した。今回の市長選では市民の側も混乱していたという。何故なら，町長三期，市長五期という小比類巻・市長が７月31日に逝去，そのため，来年４月に予定されていた選挙が突然繰り上げされて実施されることになったからだ。その上，選挙戦はいわば“身内のケンカ”となったので，１票をめぐる争いは深刻の度合いを増した(3)。

上で述べたように，小桧山と沖沢はともに小比類巻・市長の下で働いた中であり，しかも歩んだ道も小桧山が総務課長から収入役へ，一方，沖沢は企画室長から助役とほぼ似たような経歴の上に，前市長を通じて“縁続き”の関係であり，本来なら，相争う条件は全くなかった。だが，両者とも一歩も譲らず調整ができないまま，市長の急死で選挙戦に走り出した。

両陣営は投票前夜まで，支持票を読み切れなかった，という。小桧山の勝因は，立ち上がりの早さと地道な運動で支持者を固めたからであった。一方，沖沢は市長職務代理者として前市長の葬儀や事務処理といった“足

かせ”で出馬が出遅れ，しかも浜通り地区の切り崩しも上手くいかず，強いと見られた市街地でも不動票をつかめず，革新勢力の推薦で拒絶反応を見せた自衛隊票などを逃がしてしまい，善戦したが及ばなかった[4]。

三沢市長選で初当選した小桧山哲夫・市長は，勝利の喜びと今後の課題について，次のように語った。

「苦しい選挙だったが，まず浜通りを固めたのと自衛隊の方々の理解が得られたのが勝因だ。53年度の事業は決まっているがまずこれを手がけ，三沢市将来の方向付けは来年行いたい。生活環境整備を進め，福祉も充実させていく。むつ小川原開発もあり，隣接町村と連携を取りながら10万都市圏づくりを進めたい。住友化学に匹敵する工場を誘致，これを中心に北部地区に副都心づくりをする。基地問題は対政府間の問題として前向きで取り組むつもりだ。市民とは広報等を通じて対話を進め，市民本位の市政で小桧山色を出していく。助役人事などはまだ考えていない」[5]。

いわゆる「小比類巻王国」は，ついに小比類巻・市長の死去で終焉を迎えた。突然の市長選のため，身内同士の戦いとなり，小桧山が勝利したとはいえ，それが今後の市政運営に影響しないことを希望する。

≪注≫
（1）『東奥日報』1978年９月18日。
（2）「選挙」『東奥年鑑　1980年版』〔東奥日報社，1979年〕，180頁。
（3）『東奥日報』1978年９月18日。
（4）「解説：不動票も獲得」同上。
（5）「市民本位の市政を」『デーリー東北』1978年９月18日。

⑦1982年の市長選挙

任期満了による市長選は，1982年９月12日に行われた。その結果は，自民党公認で現職の小桧山哲夫（60歳）・市長が１万3,786票，社会党推薦で新人の五瀬武夫（46歳）は5,435票を獲得し，小桧山・市長が8,351票の大差をつけて再選された。投票率の方は，有権者の関心が今一つで，69.86％

にとどまった[1]。

今回の市長選では，15年ぶりの保革一騎打ちとなった。だが，小桧山・市長はいち早く出馬を表明し，保守の強力な支持と一期４年間の実績にものをいわせて再選を果たした。これに対して，瀬川候補は航空機騒音問題や古間木地区再開発などで政策論争を展開，小桧山批判票を結集して，革新系の基礎票を一挙に倍増する５千余票を獲得した。瀬川は敗れたとはいえ，かなり善戦であった[2]。

詳述すると，15年ぶりの保革対決となった今回の市長選では，保守の地盤が固く，初めから現職の小桧山・市長の優位が伝えられていた。小桧山・市長は既に１月に出馬表明を行い，自民党公認を取り付けるなど，着々と態勢固めに取り組んできた。自民党も支援を強化し，また，選挙直前には，小桧山後援会を組織するなど，三沢市内の革新系以外のあらゆる団体に手を伸ばした。選挙対策本部は引き締めに懸命だったが，結果は前回を846票上回っただけであった。その背景として，自民党支部内の楽観論のほかに，前回の市長選の時のシコリが影響した，と思われる[3]。

敗れた瀬川候補は，知名度の低さ，スタートの遅れを挽回し，社会党の基礎票に，古間木地区などから小桧山批判票を集め，社会党の全盛期にも経験したことのない5,435票を獲得した。これは三沢市だけでなく，上北地方の労組員が連日手弁当で応援に駆けつけて運動が引き締まったこと，また，瀬川候補が政策として取り上げた駅前再開発，土地区画整理問題，および航空機騒音問題などに不満を抱く市民にアピールし，それが社会党の基礎票を超えたものと見られた[4]。

再選された小桧山・市長は記者会見で，勝利と今後の抱負について，次のように語った。

「厳しい結果を受け止めている。しかし（瀬川候補の得票については）あながち批判票ばかりと考えていない。キメ細かな政策と高速交通網，特に県道のバイパス化

などに力を入れる。もちろん古間木地区の再開発も具体化される」[5]。

≪注≫
（1）『デーリー東北』1982年９月13日。
（2）『東奥年鑑　1984年版』〔東奥日報社，1983年〕，198頁。
（3）「小桧山氏が三選―三沢市長選」『デーリー東北』1982年９月13日。
（4）同上。
（5）「以外な接戦に険しい表情―小桧山陣営」同上。

⑧1986年の市長選挙

任期満了に伴う市長選挙は，1986年９月８日に行われた。その結果は，現職の小桧山哲夫（64歳）・市長が１万3,287票を獲得，共産党公認の工藤内記（2,509票）に１万0,678票の大差をつけて三選された。小桧山・市長の当選が事前に確実視されたこともあって，投票率の方は54.86％と低率に終わった[1]。

小桧山・市長は，市長二期の実績を盾に早々に三選出馬を決め，自民党主導で選挙態勢を固めた。保守系からの対立候補もなく，また，社会党も候補者難から出馬を断念，一時無競争かと思われたものの，共産党が十文字哲丸を擁立した。だが，十文字候補は告示の翌日死去し，そのため急遽，工藤内記を身代わり候補に立てたが，勝負にならなかった[2]。

その三沢市において，市発注のごみ処理施設，防災無線に絡む汚職問題が表面化し，12月12日，小桧山・市長ら５人が贈収賄の疑いで次々と逮捕される事態となった。県警と青森署の調べでは，贈収賄容疑で逮捕された小桧山・市長が業者から受け取っていた金額は，直接の逮捕容疑となった170万円のほかに別の時期に渡ったとみられる金額を加えると，総額約500万円になると見られた。

小桧山・市長は，事件発覚後辞任したものの，火の手は単に建設業界ばかりではなく，元市総務部長ら市幹部ぐるみの汚職に発展するなど，業者

との癒着，基地の街の特殊な事情を背景に醜い実態が明らかにされた[3]。

敷衍すれば，市長選挙は９月８日に実施，小桧山・市長がなんなく三選を成し遂げた。小桧山・市長の三選は，今年春の出馬を決意した表明段階で既定事実化していた，といってよい。市議22人が自民党籍を有する圧倒的な保守政界は，市長派（津島派），議長派（田名部派）に分れているが，反対勢力は次を目標に今回は不戦の構えをとった。このため，自民党支部が一致して公認申請を決議した時点で，小桧山当選は確定的となっていた[4]。

三選された小桧山・市長は，「温かい支援に感謝している，今回の選挙は，三沢市民が基地との共存共栄を認めてくれるかどうかという重要な選挙だったが，これを是とする重要な意味を持つ選挙だった」と挨拶した。また，三期に望む姿勢については「基地対策に万全を期したい。21世紀に向けての街づくりを重点としたい。当面の課題は国鉄三沢駅の改築，そして基地対策の集団移転問題」と述べるとともに，投票率については「平日の選挙だったし，前日の市議会補欠選に続いての選挙，対立候補が共産党だったことで低い率となった。50％を割らなかったので不満はあるがよしとしなければ」，と語った[5]。

だが，上で述べたように，当選した僅か３ヵ月後の12月12日，小桧山・市長は公共事業に絡む汚職事件に絡んで収賄容疑で逮捕され，三沢市始まって以来の不祥事となった。すなわち，公共工事に絡む贈収賄事件が12月12日に摘発，それは県内史上最大規模の大汚職事件となった。現職市長と市幹部の汚職は，当然のことながら，逮捕日に招集された市議会で大きな衝撃が生じた。小桧山・市長は12月13日，青森署で接見した西村秋男・市議会議長に辞表を提出し，結局，９月に再選されたばかりの小桧山市政は99日間で幕を閉じ，翌年1987年２月１日，出直し選挙が実施されることになった[6]。

現職の小桧山・市長が汚職事件で逮捕・辞任するという事態に，市民は

驚きを禁じ得なかった。しかし，市民や官憲の間では，数年前から小桧山・市長の収賄疑惑が話題となっていた，という[7]。

≪注≫

（1）「小桧山氏，大差で三選―三沢市長選」『デーリー東北』1986年９月９日。
（2）『東奥年鑑　1988年版』〔東奥日報社，1987年〕，172～173頁。
（3）『デーリー東北』1986年12月13日，『東奥日報』1986年12月13日。
（4）『東奥日報』1986年９月９日。
（5）「基地対策に万全を期す―小桧山陣営」『デーリー東北』1986年９月９日。
（6）前掲書『東奥年鑑　1988年版』，45頁。
（7）「社説：辞意表明した小桧山市長」『東奥日報』1986年12月14日，詳細は，藤本一美『戦後青森県の政治的争点　1945年～2015年』〔志學社，2016年〕，第３部第４章を参照されたい。

⑨1987年の市長選挙

市長選挙は1987年２月１日に行われた。今回の市長選は昨年末，小桧山・前市長が汚職事件で辞任し，これに伴うものであり，自民党公認の鈴木重令（46歳）・県議と共産党公認の小笠原ヨシ子・党役員の２人が立候補し，新人同士による自共の一騎打ちとなった。投票の結果，鈴木候補が１万3,452票を獲得，小笠原候補（4,307票）に9,145票の大差をつけて初当選した。投票率の方は62.35％に達し，市政施行以降，三度戦われた自共対決の市長選では最高を記録した[1]。

鈴木候補は，保守一本化で徹底した党営選挙を展開し，市議会議員26人中23人を動員して圧倒的勝利を目指した。だが，意外と得票は伸び悩み，浜通りでは健闘したものの，不動票の多い市の中心部では前市長の汚職事件が影響し，目標とした得票数に達しなかった。一方，小笠原候補は，1986年９月の市長選で共産党候補が獲得した2,500票台から1,800票上積して善戦した[2]。

敷衍すれば，市長選挙は知事選挙と同時に，２月１日に行われ，自民党

公認で新人の鈴木重令が共産党公認で新人の小笠原ヨシ子を破り，初当選した。今回の市長選挙は，小桧山・前市長が3千万円にのぼる賄賂を受け取った不祥事で辞任，そのため市民が自民党市長の汚職事件をどのように判断して審判を下すかが最大の焦点となった。しかし，結果から見る限り，共産党は汚職・腐敗のない清潔な市政を訴えたものの，「金権体質」の濃い自民党政治が継続されることになった。保守的体質の強い三沢市の政治風土の中で，共産党の小笠原候補は4,307票を獲得して健闘した。だが，堅固な保守＝自民党陣営のまえに敗退を余儀なくされた(3)。

初当選した鈴木重令・新市長は，記者会見の席で次のように述べた。

「不祥事のあとだけに市民の信頼回復を第一に考えたい。政治不信で投票率が低下すると思っていたが60%台を超えることができて感謝している。批判票は素直に受け止めたい」(4)。

『デーリー東北』は「時評：知事，三沢市長に注文する」の中で，鈴木重令・新市長に次のような注文を突きつけた。納得のいく内容であり，三沢市政の再生を望みたい。

「市長当選を果たした鈴木氏は選挙公約に▽農漁業の振興▽企業誘致▽商業振興▽国，市の責任明確化による基地対策の実施―などを掲げて戦った。三沢市の経済は基地によって支えられ，農林漁業は商工業の立ち遅れが大きいことからすれば掲げた理由が理解できないわけでない。

しかし，今回の選挙の動機を考えれば公約としては物足らなさを禁じ得ない。鈴木氏が掲げたこれらの課題解決は，確かに“新ミサワ”を築くうえで大切ではあるが，今，多くの県民が注目し，市民が求めていることは汚職の温床の徹底排除と市政の健全化であることを市長は認識，速やかに対処すべきであると思うのである」(5)。傍点は引用者。

≪注≫

（1）鈴木重令は1940年三沢市に生まれた，日大法学部卒，同大学法学研究科修了，

柴田女子高教諭，東北女子大助教授を経て，1976年～1979年三沢市議，1979年～1987年県議に就任，1987年～2007年の20年間にわたり三沢市長を務めた（『青森県人名事典』〔東奥日報社，2002年〕，917頁）。

（2）『デーリー東北』1987年２月２日，『東奥日報』1987年２月２日。

（3）「ヤング鈴木市長が誕生―出直し三沢市長選」『デーリー東北』1987年２月２日。

（4）同上。

（5）「時評：知事，三沢市長に注文する」同上。

⑩1991年の市長選挙

任期満了に伴う市長選挙は，1991年１月13日に告示され，自民党公認の鈴木重令（50歳）・市長，保守系無所属の坂本稔（50歳），および共産党公認の工藤内記（45歳）の３人が立候補した。１月20日に行われた投票の結果は，鈴木・市長が１万5,964票，坂本が2,062票，および工藤が1,351票を獲得し，鈴木・市長が次点の坂本候補を１万3,902票と大きく引き離して再選された。今回の市長選では，多数与党の自民党が現市政支援で大同団結していたこともあって，鈴木・市長の“信任投票的”色彩が濃く，そのために，投票率の低下が心配された。だが，選挙戦の終盤に至り各陣営のテコ入れもあり，投票率は前回を2.62ポイント上回る64.97％に達した(1)。

その三沢市で，５月７日，米軍のF16戦闘機が墜落するという事故が生じた。すなわち，７日午後８時40分頃，米軍三沢基地内滑走路から約1.6キロ西側に同基地所属のF16戦闘機一機が墜落。パイロットはパラシュートで脱出して無事であったとはいえ，市民は“心配していたことがついに起きた”として不安を募らせた(2)。

敷衍すれば，市長選挙は１月20日に行われ，開票の結果，自民党公認の鈴木重令・現市長が過去最高の票を得て再選された。鈴木・市長は１万６千票台に迫り，対立候補の保守系無所属の坂本稔と共産党公認の工藤内記の２人を合計しても，3,400票台にとどまり，ほぼ予想通りの得票を手に

した[3]。

選挙戦では，鈴木・市長が一期4年間の実績をもとに，人材育成を柱とする教育環境の整備，商業振興や観光開発による経済活性化，また都市基盤の整備などを取り上げて「安らぎと潤いのある国際色豊かな文化都市」づくりの推進を訴えた。その上で，産業各界や町内会，各種団体などから40を超える推薦を取り付けるなど，堅固な保守基盤に支えられ，終始一貫して安定した戦いを展開。こうして，鈴木・市長は前回を上回る得票を得て，“信任”される形となった[4]。

これに対して，前市議の坂本候補は，基地依存経済からの脱却，行政事務の体質改善などを訴え，ローラー作戦で現市政に対する批判票を狙ったものの，組織力に乏しく，支持が浸透するに至らなかった。また，共産党の工藤候補は市長選2度目の出馬で，党組織を母体に国保税の引き下げ，F16戦闘機撤去，核燃の白紙撤回など「暮らしと安全を守る市政実現」を訴えた。だが，獲得票は1986年9月の市長選で獲得した時の約半分にとどまった[5]。

再選された鈴木・市長は，事務所で勝利を宣言したあと，今回の選挙戦について次のように語った。

> 「投票率が前回より上回ったことは，市民が行政，政治に高い関心を持っていることだ。一期目で唱えた安らぎと潤いのある国際色豊かな文化都市建設に向け，市民とともに取り組んでいきたい」[6]。

既述したように，三沢市で，F16戦闘機の墜落事故が生じた。幸い住民に被害はなかったとはいえ，改めて米軍基地との「共存共栄」が問題となった。ただ，市の予算の30%が基地関連の収入で賄われ，基地従業員の1,000名は三沢市民である現実を無視できない。

≪注≫

（1）『デーリー東北』1991年1月21日。

（2）同上，1991年5月8日，米軍のF16戦闘機の墜落は，1988年9月2日，岩手県内の山林に墜落して以来，これで3回目であり，住民に大きな不安を与えた。墜落事故問題はおりから開催の県議会第79回臨時会でも取り上げられ，5月15日，小比類巻雅明（自民党），間山隆彦（公明党），鹿内博，および木下千代治（社会党）の4人の県議が緊急質問をした。F16戦闘機の飛行訓練を再開した米軍の対応への抗議と事故再発防止を求める決議案を前回一致で可決，総務企画委員会の小原文平委員長ら3名の県議と県行政特別対策室の成田洲悦室長が24日，三沢基地，防衛施設庁，および外務省に抗議文書を提出した（『東奥年鑑　1992年版』〔東奥日報社，1991年〕，123頁）。

（3）『東奥日報』1991年1月21日。

（4）「鈴木氏が再選果たす―三沢市長選」『デーリー東北』1991年1月21日。

（5）同上。

（6）同上。

⑪1995年の市長選挙

任期満了に伴う市長選挙は，1995年1月22日に行われた。その結果は，自民党推薦で現職の鈴木重令（54歳）・市長が1万4,860票を獲得した一方で，新人で共産党公認の工藤内記（49歳）は1,661票にとどまり，鈴木・市長が1万3,199票の大差をつけて三選された。

今回の市長選では，鈴木・市長がいち早く出馬を表明したのに対して，工藤候補の方は告示の3日前に立候補を決めたこともあって完全に出遅れた。そのため選挙戦は，事実上，鈴木・市長への“信任投票”という形で展開された。だから，選挙に対する有権者の関心も低く，投票率は最低の53.63％に留まり，前回の64.97％から11.34ポイント下回った[(1)]。

敷衍しておくと，市長選は1月22日に行われ，自民党推薦で現市長の鈴木重令が共産党公認の新人・工藤内記に大差をつけて三選を果たした。ただ，鈴木・市長は，前回の三どもえの市長選の時に比べて，得票を千票も減らした。しかし，得票率から見る限り，有効投票の9割近くを獲得する圧勝であった。これに対して，工藤候補は1,661票に留まり，前回の票に

300票余りしか上積みできず，一騎打ちにしては物たりない得票に終わった[2]。

今回の市長選は，現職の鈴木・市長が二期８年間の実績を強調しながら，「基地との共存共栄」をうたう一方で，挑戦者である共産党の工藤候補は「基地撤去」を強く訴え，保革の全面的戦いとなった。だが，三沢市は圧倒的に保守的勢力が優位な地域であり，その中で，鈴木・市長と小比巻雅明・県議の二大勢力が市長職と県議職の“すみ分”を前提に協調しており，しかも，公明党が鈴木・市長支持を決定，社会党は前回と同じく自由投票に踏み切った。こうした政治状況の下では，選挙は実際には，鈴木・市長への“信任投票”になったのは否めない。

共産党陣営は「基地の街三沢の市長選は，無投票にはしない」との方針を早くから打ち出していた。だが，肝心の候補者選定が遅れ，告示前の３日前になって，ようやく工藤内記候補を擁立すると発表するなど，完全に出遅れたのが痛かった[3]。

三選を果たした鈴木・市長は，次のようなコメントを寄せた。

「告示３日前まで相手が見えず，つらい戦だった。三選に導いてくれた市民に，仕事の面で恩返しをしたい。私に投票してくれた人ばかりでなく，棄権した人も政治に興味を持てるような，すみずみに目の行き届いた市政を実現したい」[4]。

≪注≫

（１）『東奥日報』1995年１月23日，『デーリー東北』1995年１月23日。
（２）『東奥日報』1995年１月23日，『デーリー東北』1995年１月23日。
（３）同上。
（４）『東奥年鑑　1996年版』〔東奥日報社，1995年〕，178頁。

⑫1999年の市長選挙

任期満了に伴う市長選挙は，1999年１月17日に行われた。その結果は，

現職で無所属の鈴木重令（58歳）・市長が１万4,194票を獲得した一方で，無所属新人で元市議会議長の浅野哲朗（66歳）は9,110票を獲得，鈴木・市長は5,084票の大差をつけて４選を果たした。1978年の市長選以来の保守一騎打ちとなったことで，市民の関心が高まり，投票率は73.16％を記録し，前回を19.53ポイント上回った[1]。

１月17日に行われた市長選では，有権者は21世紀につながる市のかじ取り役に現職の鈴木・市長を選んだ。経済情勢が一段と厳しさを増し，多くの有権者は「刷新」よりも「安定」を選択し，鈴木・市長の長年の政治経験と手堅い行政手腕に４度目の市政を託することになった，といってよいだろう。

鈴木・市長は昨年11月，四選を目指して出馬を表明，幹事400人を擁する大後援会を組織し，過去12年間の実績を強調しながら，市内全域で細やかな活動を展開した。実際，浜地区で手堅く集票，商工会や農協，漁協など組織をまとめ上げ，満遍なく票を集めた。また，一枚岩ではないといわれた建設業界の支持取り付けにも一応成功した。

これに対して，米軍基地従業員であった浅野候補の方は，現従業員やOBたちをバックに，５千票と言われる自衛隊票の取り込みに全力を投入し，若者や主婦層を中心として不動票や鈴木批判票集めに奮闘したものの，一歩力が及ばなかった[2]。

敷衍すれば，今回の市長選は1978年以来20年ぶりに，保守勢力同士による一騎打ちとなった。鈴木・市長は米軍NLP（夜間離着陸）に絶対反対する一方，浅野候補の方は「一部容認」の違いはあるが，基地に関する基本姿勢では「共存共栄」（鈴木市長），「共生」（浅野）と大差はなく，また市民病院の赤字解消策では，浅野候補は「公的資金導入」を，鈴木・市長は「自助努力が先決」を掲げ，保守対決に焦点が集まった。20年ぶりの「保・保対決」となった市長選で，有権者は今後４年間のかじ取り役に，浅野候補の“変革”よりも現職の鈴木・市長の“継続”を選択したのだ[3]。

今回の市長選は，分かりにくかった，という。何故なら，自民党の江渡・衆議院議員は浅野候補を強力に支援した一方で，同じ自民党の三沢支部長の小比類巻・県議が鈴木候補側についたからだ。そのため，市民の目には自民党県連が分裂したのだと映り，単純に党派の色分けができなくなり，それが選挙戦を不透明にした(4)。

見事に四選を果たした鈴木・市長は，四期目への抱負を次のように語った。

「支持してくれた同志と相談し，市民のためになる市政を進めていかねばならない。まず第三次総合開発計画の具体化に務めたい」(5)。

『東奥日報』が「解説：市政に一定の批判票」の中で指摘するように，三期12年におよぶ鈴木市政に目立った失政はなかった。それなのに，新人の浅野候補の得票が9,110票に達した。市議の間において，現職の対抗勢力が存在感を示した。その意味で，４期目を担当する鈴木・市長にとって，市民の批判票を厳しく受け止めて市政運営を進める必要がある(6)。

市長四選は，三沢市において小比類巻・市長に次いで２度目であり，鈴木重令・市長にこれといった失政がなかったとはいえ，市民は「長期政権」にやや寛容であるように思えてならない。

≪注≫

（１）「三沢市長に鈴木氏４選」『デーリー東北』1999年１月18日。
（２）同上。
（３）「解説」『東奥日報』1999年１月18日，「解説」『デーリー東北』1999年１月18日。
（４）『デーリー東北』1999年１月18日。
（５）同上。
（６）「解説：市政に一定の批判票」『東奥日報』1999年１月18日。

⑬2003年の市長選挙

任期満了に伴う市長選挙は，2003年１月12日に行われた。その結果は，自民党が推薦する現職の鈴木重令（62歳）・市長が１万3,281票，また，新人で元三沢市議会・議長の浅野哲郎（70歳）が7,942票を獲得。鈴木・市長は6,239票の大差をつけて，ついに五選を果たした。選挙戦は，連続四期市長の座にある鈴木市政の継続か刷新かが問われ，前回と同じ顔合わせの一騎打ちになった。だが，候補者間での明確な争点が乏しく，最後まで有権者の関心は盛り上がらなかった。投票率は61.94％に留まり，前回の選挙を11.22ポイント下回った(1)。

鈴木・市長は，これまで四期16年にわたり市政を担ってきた実績と行政手腕を掲げて，市政の継続を訴えた。しかし，選挙戦では一貫して低調ムードが流れ，鈴木陣営は「圧倒的勝利」を合言葉に組織の引き締めを図った。一方，浅野候補は，市政の刷新を呼びかけ，現職批判票と不動票の取り込みに全力を尽くしたものの，出遅れが響き，現市長の組織の厚い壁を崩すことができなかった(2)。

敷衍すれば，市長選挙は１月13日に行われ，現市長の鈴木重令が元市議会議長の浅野哲郎を難なく破り，五選を手にした。鈴木・市長は市議会与党系議員の16人と，三村申吾・衆議院議員，山崎力・参議院議員・江渡聡徳・前衆議院議員，および木村守男・県知事の支援を取りつけ，国，県とのパイプを強調しながら選挙戦を展開し，建設，農水，および商業界など関係業界に張りめぐらした組織をフルに生かして市内全域から票を集めて圧勝した。

これに対して，浅野候補は現職の多選を批判し，反現職の受け皿を目指した。また，米軍基地の訓練に寛容な姿勢を打ち出すことで，基地関係者の票の取り込みを狙った。だが，告示直前の出馬表明で出遅れ，前回協力した前衆議院議員が現職市長を支持したこともあって，善戦はしたが敗退を余儀なくされた(3)。

五選の偉業を果たした鈴木・市長は，「若者があふれる中心街づくりを進めたい。一期目の市政に臨む気持ちで誠心誠意，まじめに取り組む」と，決意を語った(4)。

『東奥日報』は，「社説：圧勝，五選におごることなく」の中で，今回の鈴木・市長の当選について，次のように論じた。

「選挙は，保守系無所属同士の一騎打ちとなり，市政の継続か刷新かが最大の争点となった。多選の是非が問われたほか，中心商店街の活性化，市町村合併問題などで論戦が戦われた結果，有権者は鈴木氏を選んだ」と指摘。その上で，「手堅い行政手腕への信頼，四期16年の実績，これといった失政がなかったことなどが評価されたのだろう」，と分析。最後に，「鈴木氏はこれまで，見直すべきは見直してきたという。市政も課題は多く，視界は必ずしもよくない。“ベテラン機長”だが，謙虚な姿勢を崩さないで圧勝におごらず，緊張感を持って操縦かんを握ってもらいたい」，と結んだ(5)。

今回の市長選では，有権者は現職の鈴木・市長の「続投」を選択した。しかし，浅野候補は敗れたとはいえ，有効投票に占める得票率は約85％で，鈴木・市長は勝利を収めたとはいえ，現職にとって，それは批判票とも受けとれる数字であり決して無視はできない。この結果を十分踏まえて，鈴木・市長には，中心商店街の活性化や三沢空港の利用促進など選挙で掲げた公約の確実な実行が望まれよう(6)。

≪注≫

（1）『東奥年鑑　2004年版（記録編）』〔東奥日報社，2003年〕，31頁。
（2）「三沢市長　鈴木氏が５選」『東奥日報』2003年１月13日。
（3）「三沢市長に鈴木氏５選」『デーリー東北』2003年１月13日。
（4）同上。
（5）「社説：圧勝，五選におごることなく」『東奥日報』2003年１月13日。

（６）「解説―公約実行，問われる手腕」『デーリー東北』2003年１月13日。

⑭2007年の市長選挙

任期満了に伴う市長選は，2007年１月14日に告示された。しかし，自民党，公明党推薦で現職の鈴木重令（66歳）・市長以外に立候補の届け出はなく，無投票で鈴木・市長の六選が決まった。市長選での無投票は，三沢が1958年に市政を施行して以来，初めての出来事であり，また，市長の六選はむつ市の杉山粛・市長と並んで県内の現役市長では最多となった。だが，その後，鈴木・市長は５月１日に，肺炎と消化管出血で死去，享年66であった(1)。

鈴木重令・前市長の死去に伴う三沢市長選は，６月10日に告示。無所属新人で自民党が推薦する，前県農協連会長の種市一正（65歳）以外に立候補の届出はなく，前回の市長選と同じく無投票で，種市候補の初当選が決まった。種市候補は，鈴木・前市長の後援会会長を務めていた(2)。

種市候補は，鈴木市政の継承と市民本位の政治を基本とし，公約として①第一次産業の振興，②「アメリカ村」整備など街中再生事業の推進，③広域観光の推進，④安心して暮らせる街づくり，などを掲げた。市の最大課題である，米軍基地問題では鈴木・前市長と同じく，「共存共栄」の立場をとった(3)。

敷衍すれば，長期政権となった鈴木重令・市長の市政の是非を問うはずであった市長選は，対抗馬が現れず，現職の鈴木・市長の無投票当選となった。それは，有権者が鈴木五期目の実績を評価し，市政の継続を“黙認”したことを意味する。ただ，これまでの市長選の結果からも明らかなように，鈴木・市長に対して，一定の批判票が存在しなかったわけでない(4)。

従来，市議会の保守系野党勢力が推す候補が，鈴木・市長の得票の半数を超える票を集めてきた。しかし，今回の場合，同勢力が対抗馬を擁立す

ることができず。また，社民党や共産党も力不足で対抗軸を示せなかった。

鈴木・市長は市長在任20年であった。だが，これといった大きな失政もなく，対抗勢力側には「誰が現職と戦っても勝目はない」という，一種のあきらめムードがあった。それは，裏を返せば鈴木・市長が強力なリーダーシップを発揮し，巧みな行政手腕により，施策面で実績を積み重ねてきたからだ(5)。

無投票で六選を勝ち取った鈴木・市長は，当選の喜びと決意を次のように語った。

「政策論争をして市民に選ばれたわけでないので複雑な心境だ。負担が大きくなった。いろいろな方の意見を真剣に聞かなければいけない。市民が安心して生活できる場をつくることが私に与えられたこと。４年間，一生懸命頑張りたい」(6)。

『デーリー東北』は「解説―地域自立へ方向性を」の中で，次のように鈴木市政に苦言を呈した。

「鈴木市政は五期20年間にわたり，基地交付金や国の手厚い補助事業などを活用し，都市基盤の整備を進めてきた。基地に依存した行政手法が目立つ一方で，雇用の拡大や人口増大につながる製造業の誘致など，新たな産業構造の構築が立ち遅れている点は否めない。
・・・しかし「基地の街」以外に“市の顔”と呼べるものがあるだろうか。基地の存在にもたれるあまり，にぎわいを創出する観光の目玉づくりや雇用効果の大きい製造業の張り付けなど地域の自立を図るための対応は，後手に回ってきたのが実情だ」(7)。

既述のように，鈴木重令・前市長の逝去に伴う三沢市長選において，政治経験のない新人の種市一正が無投票で当選したのは，20年余にわたる鈴木・前市長を結集軸としてきた市内の保守勢力側があえて選挙戦を避け，「寄らば大樹」との思惑でまとまったからだ。

市長選をめぐっては，当初，候補者として複数の氏名が浮上していた。しかし，種市一正がいち早く名乗りをあげたことで，周辺では「対抗馬を出しても勝ち目がない」との見方が広がった。

その背景にある事情の一つが，旧会津藩系と地元勢力とに大別される三沢市独特の歴史的保守勢力の構図だという。実は，鈴木・前市長は旧会津藩系に連なりながら，地元勢力との協調関係を築き，市政界での基盤を強固なものにした。一方，種市候補の方は地元勢力派であるが，前市長の後援会長を長年にわたり務め，両勢力から支援を得やすい立場にいた(8)。

無投票で当選を果たした種市・新市長は，「まだ実感がわかない。無投票で当選できたのは皆さんの応援のおかげ」と感謝。その上で，「鈴木前市長にはとうてい及ばないが，身を粉にして誠心誠意頑張れば道は開けると思う。市職員らと知恵を出し合いながら頑張りたい」，と決意を述べた(9)。

『デーリー東北』は「時評：種市市政誕生―独自カラーの発揮望む」の中で，種市・新市長に対して，次のような要望を突きつけた。

「急な選挙とあって準備不足だったかもしれないが，種市氏は出馬表明以来，市民に具体的な公約を打ち出していない。“鈴木市政を継承する”“市民と歩む市政”という漠然として題目だけではなかなか納得できない。新市長として何に取り組むのか。早急に政策を示してほしい」(10)。

≪注≫

（1）『東奥年鑑　2008年度版』〔東奥日報社，2007年〕，45頁。

（2）『東奥日報』2007年６月11日（夕）。種市一正は，1941年に三沢町浜三沢生まれた。1960年，三本木農業高校卒，1979年，青森県農協青年部協議会委員長，1996年，青森県農協連合会長，2002年，全国農業協同組合連合会会長に就任。2007年１月，三沢市長に当選，2019年６月16日まで三期12年間市長を務めた。左右の銘は何事も力を合わせることが必要，という意味の「独嘗鳴らず」（『東奥日報』2007年６月10日）。

（3）『デーリー東北』2007年６月12日。

（4）「解説―行政手腕　真摯に発揮を」『東奥日報』2007年1月15日。
（5）同上。
（6）「三沢市長に鈴木氏6選」同上。
（7）「解説―地域自立へ方向性を」『デーリー東北』2007年1月15日。
（8）「解説―具体的施策　見えぬまま」同上，2007年6月12日。
（9）「三沢市長に種市氏―無投票で初当選」『東奥日報』2007年6月11日（夕）。
（10）「時評：種市市政誕生―独自カラーの発揮望む」『デーリー東北』2007年6月12日。

⑮2011年の市長選挙

任期満了に伴う市長選は，2011年5月29日に告示。しかし，自民党が推薦する現職の種市一正（69歳）・市長以外に立候補者はおらず，無投票で再選が決まった。種市・市長は，二期目の公約として，小中学生までの医療費無償化の他に，①東日本大震災からの復興に関する委員会設置，②基地との「共存共栄」，③航空機産業の誘致―などを掲げた。その上で，市内主要団体トップの支持を確保し，また市議19人のうちで17人の支援を得て万全な態勢を固めた(1)。

上で述べたように，市長選は5月29日に告示された。現職の種市一正・市長ただ一人のみが立候補し，無投票で2度目の当選が決まった。ただ，対立を避けて無投票を画策する三沢市内の保守勢力サイドに，問題点がないわけでなかった。

『東奥日報』は「解説：対立避ける保守勢力」のなかで，その課題を次のように指摘した。

「三沢市長選は種市一正以外に立候補者が現れず，故鈴木重令前市長が当選した2007年1月の選挙から3回連続の無投票という異例な結果となった。市内保守勢力が対決をさけて支持を一本化する構図が続き，政策論争が高まらないままだ」，と批判した。

その上で「鈴木前市長の路線を継承し，無難な市政運営で一期目を乗り

切った種市氏には，独自色が見えないとの批判がつきまとう。だが，選挙では民主，共産以外の市議17人が種市氏を支持。それぞれの不満をのみ込んだ形で結束が演出された」，と強い懸念を示した(2)。

『デーリー東北』も同じく「解説―真の“信任”得る努力を」の中で，種市・市長に次のように注文をつけた。

「鈴木重令市長の死去に伴う“緊急登板”から４年。幅広い支援態勢に支えられた種市一正氏（69）が，前回と同様，無投票当選という形で２期目の市政を担うことを決めた。１期目を無難に乗り切ったことが認められたと見る向きもあるが，今回も市民が市政に対し，意思表示する機会がなかった。それだけに，種市氏には，積極的に地域に出向いて情報を発信し，市民の声に耳を傾け，真の“信任”を得ていく努力が求められる」(3)。

５月29日に無投票再選を果たした種市一正・市長は，記者団からの質問に次のように答えた。

―無投票再選だが。

無投票当選は重いと思う。４年間の実績を見ていただいて“お前に任せる”ということでないか。今まで申し上げてきた政策が，市民に理解されたとすれば，しっかりと（実現に向けて）やっていきことが私の使命だ。

―何から取り組むか。

まず，復旧・復興だ。三沢漁港の事務所が今の場所でいいかも含め，専門の委員会を立ち上げていろいろな角度から検討し，良好な方法を見出したい。

―基地問題への対応は。

共栄共存が基本路線だ。（嘉手納基地からの空軍機移転案については）これから正式な要請が，来るのかどうかも分からない。

―MG プラザの今後の方向性は。

念願の（中心地街地活性化）タウンマネジャーも決まった。その方面に相当ノウハウのある方なので，期待したい。米軍にも協力をお願いしながら，当初の目的である異国情緒漂うような施設にできるだけ近づけるよう（運営する MG インターナショナルの）筆頭株主として努力していく(4)。

今後，三沢市で市長や県議のポストが選挙前の調整で決定するという，市民不在の状態が続くならば，「協同のまちづくり」を掲げる市政について市民の関心が一層遠のくのは避けらない。その意味で，こうした無投票当選といった事態について，政治家や政党が真剣に反省すべき時期にきている，といわねばならない[5]。

≪注≫

（1）『東奥年鑑　2012年版』〔東奥日報社，2011年〕，13頁。

（2）「解説：対立避ける保守勢力」『東奥日報』2011年5月30日，なお，解説を執筆した古川靖隆・記者は，こうした傾向が市長選に先立って4月に行われた県議選にも見られたとして，次のように批判する。「同市選挙区は現職・小繪山吉紀氏のみが立候補し，無投票当選した。07年に引退した小比類巻雅明元県議は当選5回のうち3回が無投票。“鈴木―小比類巻”から“種市―小繪山”へと顔ぶれが変わっても，市長と県議を一組にして保守層を固める図式は同じ。相乗りできる候補者を探りあう保守勢力の動きが透けて見える」（同上）。

（3）「解説―真の“信任”得る努力を」『デーリー東北』2011年5月30日。

（4）「無投票当選は重い―種市氏」同上。

（5）「解説―対立避ける保守勢力」『東奥日報』2011年5月30日，注（2）を参照されたい。

⑯2015年の市長選挙

任期満了に伴う市長選は，2015年6月7日に行われた。その結果は，無所属で現職の種市一正（73歳）・市長が1万2,582票，一方，無所属新人で元市議の鈴木重正（46歳）は1万0,194票を獲得，2,388票の差をつけて種市・市長が三選を飾った。種市・市長は，二期8年の実績や国，県との太いパイプを強調し，保守層に浸透して勝利した。投票率は，激戦を反映したのか72.18％に達し，前回を10.24ポイント上回った[1]。

12年ぶりとなった選挙戦は，在任中に死去した鈴木重令・前市長の市政継続を掲げて2007年に無投票当選を果たした種市・市長と，鈴木重令の長男である重正候補とが市内保守派を二分する争いとなった。両候補は共に

自民党籍を有しており，そろって党の推薦を申請した。党市支部は鈴木候補を推薦したものの，しかし，党県連の方は自主投票を決めた。そのために，自民党は分裂選挙の様相を呈した(2)。

詳述すれば，市長選は，知事選と同じ６月７日に行われ，現職の種市一正が鈴木重正を下して三選。二期連続無投票で当選してきた種市・市長は，初めて選挙戦に臨み，市財政健全化やインフラ整備などの成果をアピールし，三期目の公約として雇用の確保に向けた航空機産業の誘致，子育て世代を支援する交流拠点「子ども館」建設等を掲げた。その上で，市議17名中10人による支援市議団に加えて，４月の県議選で共闘した自民党の小桧山県議が全面的に支援してくれた。種市・市長は現職の強みを生かして商工会，農協，漁協，建設業界などからも幅広く支持を取りつけ，組織戦を展開した(3)。

これに対して，鈴木候補の方は，市政刷新を掲げ，市議４人の支持を得た。昨年12月の出馬表明後から，市内30ヶ所以上で市政報告会を開催して積極的に活動し，人口減少社会への早急な対策を訴えるとともに，種市市政への批判を強めた。父の重令時代からの支持層を基盤に，各業界や団体の若手トップに浸透したものの，一歩力が及ばなかった(4)。

今回の選挙で三選を手にした種市・市長は，記者団の質問に対して次のように答えた。

―厳しい戦いだった。

選対本部を中心に，市民の方々にこれまでの二期８年の政策を理解していただくよう活動した。

その足跡が評価されたものと思う。投票率は72％を超え，市民の関心は高かったと思う。

―分裂選挙による議会運営へ影響は。

心配していない。市議の皆さんはしっかりと三沢の方向付けを考えて行動すると思う。理解してくれるような議案を提案する。

―今後４年間の市政運営の方針は。

市総合振興計画の後半になる，マニフェストに掲げた15項目を実行することにより，計画を達成したい。今までさまざまな種をまいてきた。仕上げの段階として花を咲かせたい。

―基地問題への対応は。

共存共栄を貫く。いろいろな課題があるが，米国はイエスか，ノーがはっきりしている。はっきりと態度を示していきたい。

―一次産業をどのように振興していくのか。

環太平洋連携協定（TPP）などいろいろな問題を抱えている。日本の農業の良さである安心，安全を押し出しながら，基盤整備をお手伝いしていきたい(5)。

周知のように，三沢市では県議選，市長選において，無投票が続き，今回は12年ぶりの選挙戦となった。種市・市長は初めて有権者の審判を仰いだのだ。その結果は，種市・市長が現職の強みを発揮し，三選された。種市市政は，２期８年間で比較的安定した行政運営に徹したこともあり，堅実さが一定の支持を得たのだ，といってよい(6)。

≪注≫

（１）『東奥年鑑　2016年版』〔東奥日報社，2015年〕，19頁，『デーリー東北』2015年６月８日。

（２）『東奥年鑑　2016年』，19頁。

（３）『東奥日報』2015年６月８日。

（４）同上。

（５）「一問一答―総合振興計画仕上げへ」『デーリー東北』2015年６月８日

（６）「解説―堅実さ一定の支持」同上。

⑰2019年の市長選挙

任期満了に伴う市長選は，2019年６月２日に投票が行われた。即日開票の結果，無所属新人で元県議の小桧山吉紀（69歳）が１万2,060票を獲得し，無所属新人で元市議の鈴木重正は9,762票獲得，小桧山候補が2,298票の差で初当選を果たした。小桧山候補は，現職の種市一正（77歳）・市長から後継指名を受けて「市政の継承」を掲げ，より多くの有権者に浸透。

投票率は69.09％で，前回を3.09ポイント下回った。また，市選挙管理委員会で，期日前投票の集計に関するトラブルがあり，開票作業が大幅に遅れた[1]。

自民党籍を持つ小桧山吉紀と鈴木重正の両者は，共に自民党の推薦を党三沢市支部に申請した。だが，同支部はいずれも推薦しないことを決定し，「市政の継承」を掲げる小桧山候補と「三沢の進化」を掲げる鈴木候補が，保守政界を二分した激戦を繰り広げた。

前回の市長選では，2007年５月に急逝した前市長・鈴木重令の後援会長を務めていた現職市長の種市一正に，重令の長男重正が挑み，因縁の対決となった。今回の市長選でも，種市が小桧山を後継指名するなど，因縁が引き継がれた形となった[2]。

小桧山候補は市議二期，県議三期の実績や県とのパイプを強調し，2018年３月に策定した第二次市総合振興計画を大成させるとした。選挙公約は「確かな歩みを前へ」をキャッチフレーズに「（仮称）子どもしあわせ憲章」制定など教育環境充実，ICT タウン推進など18項目の目標を設定した。種市一正・前市長と10人の市議団が支援にまわり，経済関係者や建設業界などによる組織戦を展開し，幅広く支持を集めた。

一方，自民党の市支部幹事長を務める鈴木候補は市議６人が支持し，昨年６月にミニ集会を始めるなど動きを活発化させ，市民の意見を聞く“対話重視”の姿勢をアピールした。告示後は各所で街頭演説を繰り返し，また選挙公約には，「市民一体となった『健康寿命日本一』の三沢づくり」や「小中学校の給食費完全無料化」を掲げ，鈴木重令の支持層や若手経営者らに浸透したが一歩及ばなかった[3]。

敷衍すれば，三沢市長選は６月３日に行われ，元県議の小桧山吉紀が元市議の鈴木重正を下して，初当選した。両者は自民党の推薦を得ることができず，市内の保守勢力は分裂し，市政界を二分する戦いを演じた。選挙公約では，細部で違いがあるものの，目指す市の方向性に違いはなく，「経

験」と「若さ」を掲げるどちらが新市政の指導者に相応しいかを問う戦いとなった(4)。

小桧山候補は，種市一正・前市長の後継指名を受けて立候補。現市政の継承に加え，市議二期，県議三期を務めた政治経験から「即戦力として市政を担う」と主張して選挙を戦った。種市・前市長からほぼ引き継いだ後援会もフル回転し，各所の街頭演説に多数の人々を集め，手厚い支援態勢を見せた。

それに対して，二度目の挑戦となった鈴木候補は，2007年に市長六期目途中で死去した父重令の地盤に支えられ，自身の後援会組織も若手が精力的に活動を展開。若さを前面に押し出し，組織戦を展開した小桧山陣営との差別化を図り，草の根運動に徹したが，小桧山候補の厚い支持基盤を崩すことができなかった(5)。

市長に初当選を果たした小桧山吉紀は，記者団との一問一答で，次のように語った。

―厳しい選挙戦だった。

これまでの青森県議選では経験したことのない人の量，握手の量，叱咤激励の量があった。それをはねのけてきょう万歳三唱を聞き，疲れが吹き飛んだ。これから４万市民のために頑張れるとの確信を持った。

―最優先で取り組みたい施策は

まずは子育て支援。そして，先輩たちが築いてきた三沢基地との共存共栄，基幹産業である農業ではナガイモ，ゴボウ，ニンニクのブランド化。訴え続けた公約があるので県と連携してやっていきたい。第二次市総合振興計画を作った種市一正市長に指導を仰ぎながらやっていく。

―市政界を二分する激戦だった。今後の市政運営をどうする。

あまりしこりを残せば市政が停滞する。難しいかもしれないが，できるだけ融和な形でできればいいと思う(6)。

以上で見てきたように，新人同士が激突した三沢市長選では，「市政の継承」を謳った小桧山吉紀がより多くの支持を集めて初当選した。小桧山

・市長は市議・県議合わせると五期政治家として経験を有する。しかし，行政トップの指導力や決断力の方は未知数であり，今後，「独自色」をどのように打ち出せるのか，手腕が問われることになろう[7]。

≪注≫
（1）「三沢市長選挙」『東奥年鑑　2020年版』〔東奥日報社，2019年〕，12頁。
（2）『東奥日報』2019年6月3日。
（3）同上。
（4）「三沢市長に小桧山氏―保守分裂，鈴木氏破る」『デーリー東北』2019年6月3日。
（5）同上。
（6）「一問一答―子育て支援　最優先で」同上。
（7）『東奥日報』2019年6月3日，『デーリー東北』2019年6月3日。

第3章　歴代三沢市長

①林静（在任期間：1958年9月1日～1959年4月30日）

林静は1892年，三沢村に生まれ，長じて大三沢町長を務めた。1958年9月1日，大三沢町が三沢町に改称，即日市制施行し，三沢市が発足。林はそのまま市長におさまっていた。しかし，翌年の市長選で敗退し，一期のみの三沢市長で終わった。

林は図南藩士の家柄で，旧制八戸中学から盛岡高等農林獣医学科卒。北海道庁種畜場勤務。青森県立種馬育成所技師を経て，1918年，三沢で獣医師開業。上北郡獣医師会長，三沢村信用販売購買利用組合理事長などに就任した。

政治歴は1929年，三沢村議に当選。1931年～1945年，三沢村長。戦後公職追放後，1955年，大三沢町長に当選。1958年，初代三沢市長に就任。一代にして，村長，町長，および市長を歴任した稀有な例だ。1957年，町長時代に庁舎新築するなど，三沢の都市整備に尽力した。1969年，勲一等瑞宝章。1972年，市功労者表彰。1970年死去，享年78であった[1]。

≪注≫

（1）「林静」『青森県人名事典』〔東奥日報社，2002年〕，560−561頁。

＊市長選での得票

・1959年の選挙　　7,188票（落選）

②小比類巻富雄（在任期間：1959年５月１日〜1978年７月31日）

小比類巻富雄は，1911年三沢村に生まれた。旧制八戸中学卒。1948年，初代大三沢町長に当選し，三期務めた。その後，三沢市議四期，1955年には，県議に転じ一期務めた。1959年５月，三沢市長に出馬して当選，五期連続20年間市長の職にあった。三沢市体育協会会長などを歴任。1978年７月に死去，享年67であった(1)。

≪注≫

（1）「小比類巻市長の死去」『東奥年鑑　昭和55年版』〔東奥日報社，1978年〕，207頁，「三沢市長選―知名度　実績で差」『デーリー東北』1975年４月28日。

＊市長選での得票

・1959年の市長選	7,188票
・1963年の市長選	7,250票
・1967年の市長選	１万0,779票
・1971年の市長選	9,649票
・1975年の市長選	１万0,064票

出典：『三沢市選挙管理委員会』

③小桧山哲夫（在任期間：1978年９月７日〜1986年12月13日）

小桧山哲夫は1922年，三沢村に生まれた。旧制野辺地中学卒，シベリア

抑留を経て，1948年に大三沢町役場に就職，1968年には三沢市収入役に就任。1970年，県議選に出馬して当選，二期務めた。1978年，三沢市長選に転じて当選，1986年９月には三選されたものの，同年12月，収賄容疑で逮捕され辞職。趣味は読書，柔道５段の腕前，体力は抜群で，酒も強い[1]。

≪注≫

（１）「このひと」『東奥日報』1986年９月９日，「ひと」『デーリー東北』1986年９月９日。

＊市長選での得票

・1978年の市長選	１万2,910票
・1982年の市長選	１万3,786票
・1986年の市長選	１万3,287票

出典：『三沢市選挙管理委員会』

④鈴木重令（在任期間：1987年２月１日～2007年５月１日）

鈴木重令は1940年，三沢村に生まれた。日大法学部卒，同大学法学研究科修了，柴田女子高教諭，東北女子大助教授を経て，1976年～1979年，三沢市議。1979年には県議に転じて当選，1987年まで三期務めた，1987年，市長選に出馬して当選，1987年から2007年の20年間にわたり三沢市政に君臨した。鈴木家の先祖は会津藩士の流れをくみ，旧三沢村長の祖父・武登馬（むとめ），市議，県議を務めた父・元（つかさ）と三代続く政治家の家系。座右の銘は「至誠一貫」で，「性格は真っすぐだが短気」と自己分析。本職は造園業，ゴルフはハンデー25，酒はビール党[1]。市長六期に入った2007年５月１日，在職中に肺炎と消化管出血で死去，享年66であった[2]。

≪注≫

（1）「ひと」『デーリー東北』1991年1月21日。

（2）『青森県人名事典』〔東奥日報社，2002年〕，917頁，「この人」『東奥日報』2007年1月15日。

＊市長選での得票

・1987年の市長選　　1万3,452票

・1991年の市長選　　1万5,964票

・1995年の市長選　　1万4,860票

・1999年の市長選　　1万4,194票

・2003年の市長選　　1万3,281票

・2007年の市長選　　無投票当選

出典：『三沢市選挙管理委員会』

⑤種市一正（在任期間：2007年6月17日～2019年6月16日）

種市一正は，1941年に三沢町の浜三沢に生まれた。1960年，三本木農業高校卒。1979年，青森県農協青年部協議会委員長，1996年，青森県農協連合会長，2002年，全国農業協同組合連合会長に就任。2007年6月，三沢市長に当選，2019年6月16日まで三期12年間市長を務めた。座右の銘は何事も力を合わせることが必要，という意味の「独嘗鳴らず」，古木を集めるのが趣味[1]。

≪注≫

（1）「この人」『東奥日報』2007年6月11日。

＊市長選での得票

・2007年の市長選　　無投票当選

・2011年の市長選　　無投票当選

・2015年の市長選　　１万2,582票

出典：『三沢市選挙管理委員会』

⑥小桧山吉紀（在任期間：2019年６月～）

小桧山吉紀は1950年，三沢町に生まれた。帝京大経済学部卒。三沢市議を二期，県議を三期務めた。2019年６月，三沢市長選に無所属で出馬，初当選を果たした。時に69歳であった[1]。

≪注≫

（１）「小桧山吉紀」『青森県人名事典』〔東奥日報社，2002年〕，50頁。

＊市長選での得票

・2019年の市長選　　１万2,060票

出典：『三沢市選挙管理委員会』

第４章　政権交代の類型（パターン）

三沢市では，1958年９月に市政を敷いて以降，６人の市長が出現しており，政権交代は５回生じている。その類型は，①の政治的失態ないし不正によるものが２事例，②の経済的環境の崩壊ないし変動によるものがゼロ，③の病気ないし死亡によるものが２事例，そして④の引退ないし権力移譲によるものが１事例である。

初代三沢市長は，1955年５月の町長選挙で勝利した林静で，1958年９月に市制に移行した。林市長は，1959年４月の市長選挙で，自民党新人の小比類巻富雄に敗れて市長の座を去った。今回の事例は判然としないが，①の政治的**失態**―不正によるものと，思われる。

その後，小比類巻は五期20年間にわたり，市長の座に君臨した。だが，小比類巻は，1978年７月31日に死去。９月17日に実施された繰り上げ市長選挙では，自民党が推薦した県議の小桧山吉紀が当選した。今回の事例は③の病気ないし**死亡**によるものである。小桧山は市長に三選され，12年間市政を担当した。しかし，３期目に当選した３ヵ月後の1986年12月，収賄容疑で逮捕され，市長を辞任。翌1987年２月１日に行われた市長選挙では，自民党の県議の鈴木重令が当選した。今回の場合は，明らかに①の政治的失態―**不正**によるものであった。

その後，鈴木市長は何と，五期20年の長期にわたり，市長の座を堅持した。鈴木市長は2007年１月の市長選で，六期目も無投票で市長に当選したものの，５月１日，病気で死去した。６月の市長選挙では，無所属で自民党が推薦する種市一正以外の立候補者がおらず，無投票当選となった。今回の事例は，③の病気ないし**死亡**によるものであった。

2019年６月の市長選挙では，無所属新人で元県議の小桧山吉紀が当選。小桧山は，三期市長を務めた種市・市長から後継指名を受けて「市政の継承」を掲げて当選した。今回の事例は，④の引退ないし**権力移譲**によるものであった。

第５章　三沢市政治の特色

三沢市は，戦後急速に発展をとげた都市である。1948年に大三沢町に，そして10年後の1958年には県下で７番目の市制を敷いた。その背景にあるのは，米軍基地の存在である。米軍の基地拡大と共に，三沢市は豊富な交付金を手にきたのだ。それが，三沢市政に多大な影響を及ぼし，他の市とは全く異なる政治的・経済的体質を形成してきた。

三沢市は，保守勢力がことのほか強力である一方で，革新勢力は弱体である。また，市長選において自民党系市長が三回にわたり「無投票当選」したことが記憶に新しい。三沢市の市長は，市民に選挙で問うことなしに

首長のイスを確保してきたのである。そこには，保守勢力側の「戦いを避けて勝利する」行動がかい間見られる。

三沢市ではまた，「多選市長」が多いことも特色の一つである。実際，小比類巻富雄・市長は五期市長を務めたし，また，鈴木重令・市長に至っては何と六選を果たし，長期政権を堅持してきた。この他に，小桧山哲夫市長や種市一正市長も三選されており，三沢市の政治は長期政権が一般的である。一期のみの市長は，初代の林静市長だけで，その他は長期政権を堅持してきた。ただ裏がして言えば，その事実は必ずしも市政が安定しているのではなくて，一面では沈滞している証拠だとも，いえなくもない。

＊参考文献
・『三沢市史　通史編』〔三沢市，1988年〕
・『青森県人名事典』〔東奥日報社，2002年〕
・『東奥年鑑』

（未完）